

第三章 教える漢字は一日一字！

●……一歳半で三〇〇〇字の漢字を覚える

漢字はゼロ歳のときからでも教えることができます。生後一〇か月から漢字教育を始めたという例も聞いています。

その子は田中庸介君たなかようすけというのですが、生後一〇か月の時、愚図ぐずって泣いているときに、神棚から下がっている「命名 田中庸介」という字を見て泣き止み、ジーと見ていたそうです。

お母さんが「これが庸ちゃんの名前よ。こっちが田中で、こっちが庸介」と読んでやったら、すっかり機嫌が直ったというのです。それ以後、庸介君が愚図ぐずると、いつもそこへ連れて行くと泣き止んだそうです。

そんなことがあって、漢字教育を始めたら、一歳半の時には三〇〇〇字の漢字が読めるようになっていきます。この子は東大の医学部を出て医者になったと聞いています。

一歳半といえば、普通だったらかタコトしか言えない時期なのに、漢字が三〇〇〇字も読めるというのです。これは小学校二、三年生並みですから、にわかには信じられませんでした。しかし、実際に、この子どもに会って確かめてみると本当に漢字カードが読めたのです。

それだけではありません。田中家では何紙か新聞を購読していたのですが、「朝日新聞を持って来て」と言うと、いくつかの新聞の中からちゃんと朝日新聞を取って来ます。

田中庸介君のようなケースも他にもあることはあります。しかし、ゼロ歳から始めたほうがいいのかというと、個人差もあるので、一概には言えません。漢字教育を始めるのに生後一〇か月はまだ早すぎるかも知れません。言葉を盛んに発するようになった頃から始めるのがベストだと思います。

●……言葉の学習は身近なものから始める

赤ちゃんが、片言をしゃべり始めるのは生後八か月を過ぎる頃からでしょう。この頃から言葉の

学習は始まっているのです。このときに子どものお手本となるのはお母さんです。言葉はすべて母親から学ぶ、つまり真似るのです。ですから、この時期の母親のしゃべり方や発音は、赤ちゃんの言葉の教育に大きく影響します。

片言をしゃべれるようになる、赤ちゃんは母親の言葉を繰り返して聞くことによって、まだそれを正確に発音することはできなくても、その言葉を頭の中に蓄積させているのです。赤ちゃんはお母さんの目元をしっかりと見えています。お母さんの口元を見ながら一生懸命真似をしようとします。そして「マンマ」のような発音しやすい言葉だと早く言えるようになります。赤ちゃんが、身近ないろいろなものに興味や関心を持ち始めるのもこの頃です。

「これは鼻よ」とか「これは耳よ」とか、すぐに体で感じられるようなことを話しかけてやるようにしてください。

それも、お母さんが自分の鼻をさわって「これは鼻よ」と言って、それから赤ちゃんの鼻をさわって、「鼻よ、鼻、鼻」というように繰り返して言ってやりましょう。これで赤ちゃんは「鼻」を覚えます。つまり、反復によって脳が育つのです。

カシは四股を踏みます。横綱になっても四股を踏み続けます。いくら踏んでもムダではないのです。ムダどころか、踏むことが実力を伸ばしていくことにつながっているわけですから、横綱といえども毎日毎日同じことを繰り返しているのです。脳も同じです。

目、耳、鼻、手、足といった、赤ちゃんにとって、もっとも身近なものから、「これは時計よ」とか「これはお菓子よ」とか、赤ちゃんの目に見えるものを教えてやるのがいいでしょう。このとき、「時計」とか「お菓子」という漢字カードを同時に見せてやるのです。

ポイント：漢字をかなよりも先に学習した私の長女は、幼稚園の頃から私の二、三倍の速さで本を読んでいました。しかも内容をちゃんと押さえています。た。むしろそういう速さで読むと大事なところが頭に残るのではないかと
思うのです。

●……生活のまわりに漢字カードを

言葉がかなりしゃべれるようになった幼児に、本格的に漢字学習をさせる効果的な方法とはどういうやり方でしょう。

まず、名刺やカルタ程度の大きさのカードを用意します。そこに日常生活の中で幼児の目に触れるものの名前を漢字で書いて貼っておくのです。机、椅子、冷蔵庫、花瓶……何でも貼っておけば、幼児は興味を示してきます。

そうすると必ず子どもは質問して来ます。

「これ、なあに？」

そうしたら読んで教えてやればいいのです。より興味を引くため、子どもの好きなきれいな色のペンを使って書いたり、色とりどりの紙で漢字カードをつくったりすることも一つの方法です。

字はなるべく大きく大きく書いたほうがいいでしょう。線が細いとはつきりしませんから、カードにふさわしい大きさを書きます。その際に筆を使うと、字の縦横の大きさにおのずから強弱がつかますから、よりわかりやすいと思います。

筆で書くのが一番いいのですが、もちろんマジックでもかまいません。ただし、その場合は、筆で書かれた字を手本にするといいと思います。

まずは身近なものに貼って教えますが、犬や猫を飼っていたとしても、生き物にカードを貼るわけにはいきません。また太陽とか月とか風といったものにもカードは貼れません。

こういうときは絵本を使います。絵本を利用すれば、動物でも山や川でも森や星とかでも教えることができます。こうすればほとんどすべてのものを教えることができます。

市販されている幼児絵本は、ほとんどがかな書きですから、この上に隠れるように紙を貼って漢字を書き入れるのがいいでしょう。

少なくとも漢字を一〇〇字くらい覚えさせないうちはかなを教えるのはお勧めできません。かなは最初は目に触れさせないようにします。

絵本で教えることも必要ですが、なるべく本物を見せるべきでしょう。動物などは、たとえば猿でも象でも、動物園に行って本物を見せる努力が親には必要です。一度でも本物を見ていれば、絵本を見せたときの反応も違ってきます。同じ猿という言葉でも、実際に見れば、言葉が「生きたものになってくるのです」。

●……教える漢字は具体的なもののほうがいい

鳩という漢字が鳥よりやさしいのは、それが目に見える実在を表わした字だからです。幼児は、そのまま丸呑みするので、言い換えますと、具体的なものほど覚えやすく、抽象的なものほどおぼろしいのです。

「鳥」という鳥や、「魚」という魚は存在しません。実在するのは、鳩であり鷹であり鶴です。鯉であり鮒です。それなのにそれをすべて鳥とか魚というから混乱してしまうのです。

鳩だったら最初から「これは鳩よ」と、鯉だったら「これは鯉よ」と教えるべきです。そうすれば幼児はすぐに覚えるはずですが。

鳩や鷹や鶴をまず覚えさせます。これらを覚えたら、これらには「羽があって、嘴があって、足が二本」など、いくつかの共通項があることに気がつきます。

ここで初めて「鳥」という概念が理解できるようになるのです。こうして、ものをまとめたり、分類したりする習慣が自然とついてくるのです。これは、後に学校で学ぶ「集合」の学習にも大いに役立つこととなります。

こういうふうに文字を覚えていくと、全然知らない鶯や鶯という複雑な字を見ても、それらが「鳥の仲間」ということはすぐわかるようになります。これは推理する力や、想像力、判断力などが向上してくるからです。

元来、文字というのは、耳で聞く言葉を目でとらえるようにしたものです。言葉を耳だけでなく、同時に目でもとらえることによって、理解しやすくなります。これはアメリカの実験なのです。学習効果を比較してみると、なんと一対二対六・五という結果が出ました。

たとえば「手を洗う」ということを教えるときでも、ただ「食事の前には手を洗いなさいね」と耳に訴えるだけでなく、「手を洗う」と書いて見せるべきです。

そうすれば字を覚えるのと一緒に、その事柄がよくわかって記憶され、生活の中でも生かされてきます。漢字で書けるものは、何でも漢字で書くようにして教えてやると、理解力が違ってくる

のです。

●……子どもの好きな字を選ぶ

どんな字から教えたらいいでしょうか。具体的なものから教えるのがいいのですが、実際に字を選ぶ基準は、とにかく幼児が好きそうな漢字を選ぶことです。

記憶の原理は、まず「関心」、そして「反復」です。関心のないものに対して、子どもは絶対に記憶することはないのです。これは大人でも同じです。

虫の名前などもいいでしょう。具体的にそのものがわかっているし、興味があります。蝉、蜂、蝶、蟻、蛙、蛇……こういう字を覚えていくと、それぞれの漢字から「虫」という共通項を見つけます。そこで「虫とは何か」を教えてやればいいのです。ここまでくると、蜘蛛という字もむずかしくはないのです。

花の名前もいいかもしれません。薔薇という字は書くと思うからむずかしく思うのです。これは大人だつてなかなか書けません。でも読むだけなら、これくらい複雑で特徴のある字なら覚えやすく忘れないものです。

「雲」とか「雪」という字もいいでしょう。雲はさわることができなくても、外へ出ればすぐ見えま

す。雪が降ったら、ぜひ手で触れさせてください。
雲と雪——「雨」という共通部分を見つけ出し、この“あめかんむり”は天気とか空に関係あるものだけということを知れば、これだけで「霜」「霧」「霞」など、いろいろな字を推理することができます。

この本の中でも何度もくり返していますが、子どもは自分で理解をしたがっています。本当は何でも自分でやりたいのです。ですから親が何もかも教え込んでしまうのではなく、自分で知ることの喜びを味わえるような教え方こそが望ましいといえます。

ポイントものには順序があります。いきなり本を読めとか漢字を見せてもダメです。自分からやるように仕向けることが何よりも大切です。私は自分の子どもには五歳くらいから漢字を教えました。幼稚園の間に小学校五、六年生程度の本だったらスラスラ読んで理解できたようです。

●……読めても意味がわからないのでは何もならない

「義」を知ることとはどういうことなのかとお思いでしょう。これこそ私の漢字教育でもっとも重視していることなのです。

じつは目で見えるものは、カードを使ったり、絵本を使ったりして教えることができますが、たとえば「冷たい」とか「熱い」とかを教えるにはどうしたらいいのでしょうか。これを教えることが「義」を知ることです。

「形・音義」という言葉があります。漢字教育では「形」は書くことに、「音」は読むことになりませんが、その形や音に生命を与えているのが「義」なのです。義を理解することは、その字が持つ本当の意味を知ることです。

たとえば「冷たい」という字を「つめたい」と読めて、なおかつ書けたとします。

しかし、この意味を知らなければ何にもならないわけです。この字を教えるには、子どもに氷の入った袋を持たせてみて、その袋に「冷たい」という漢字カードを貼っておいて、実際にこの感触を知っているのです。つて、指がかじかむような感覚が「冷たい」ということなんだということをわからせなければならぬのです。

この体験こそが「冷たい」という漢字の「義」なのです。

この「義」をもって、「つめたい」という音(言葉)と「冷たい」という形(字形)とに結びつけ、そしてこれを大脳に経験として記憶させることこそ本当の漢字教育なのです。

こういう形で学習すれば、子どもは、この「冷たい」という字を見れば、それを触ったときの感触がよみがえり、その体験を思い出します。

単に字が読めても、その字が正しく書いても、このような体験を伴わないとすれば、漢字教育が成功したとはいえないのです。漢字は体験を呼び起こさせるシグナルなのです。

●……教える漢字は一日一字でよい

さて、いざ教えるとなると、一日に何字ぐらい教えたらいのかと思われるでしょう。せっかく教

えるのなら、つい一字でも多く……と思いがちになります。教育熱心なお母さんほど、こうしたしなければいけないと計画をたててしまいがちです。

しかし、一日一字でいいのです。もちろん子どもが興味を持てば、二字でも三字でもかまいませんが、基本的には一字ずつと求めてください。初めから、いつまでに何字と目標を立てる必要はないのです。

それよりも、子どもの興味をそらさずに、負担にならない程度で進めることが大切です。肝心なのは、何字教えるかではなくて毎日続けることです。

何ごとも継続が大切です。とりあえずは一週間やってみて、子どもの様子をみます。それを十日、一か月と伸ばして、もっとも楽しんで、負担にならないでやれるペースをつかめばいいのです。三日坊主にならないよう、興味を失わないような工夫も必要でしょう。

こうして幼児が興味を持って続けられたとすると、後は放っておいてもどんどん覚えるようになります。親が教えようとしなくても、子どものほうから「この字は何て読むの？」と積極的に聞いてくるようになります。こうなったら、もう親が口出しをする必要はまったくありません。

就学前に、小学校で習う一〇〇〇字近くを読めるようになっていけば、小学生向けの本はスラスラ読めます。教科書も読めるようになります。国語だけでなく、理科も算数も社会も、理解のしかたが違ってくるはずですよ。こう思って気長に継続することが、何より大切です。

ポイント：自分で考えさせる、自分の頭を使わせることの重要性を、今の教育は無視しています。知識を詰め込むやり方ですから、頭を使って考えたり推理したりする機会は失われていきます。したがってそういう力は少しも育ちません。

●……子どもは繰り返しが好き

大人にはなかなか理解できないのですが、子どもというのは繰り返しが好きです。

同じ話を何度も何度も聞こうとします。大人には、よく飽きないと思うような話でも、何回でも聞きたがります。

私の娘が幼児だった頃、寝る時間になると、いつも同じ話をせがまれたものです。一日に三回も四回も同じ話をしたこともありました。

自分が好きなことは徹底して好きというのが子どもです。飽きるということがありません。昨日読んでやった本を、次の日も、その次の日もまた読まされたという経験は、みなさんにもあるのではないかと思えます。

このように幼児は繰り返しが好きだという本性をよく理解しておくことが肝要です。

漢字を覚えるまでは、どんな親でも何度も繰り返してやりますが、いったん覚えてしまったと思うと、つい反復練習を怠ってしまいがちです。

しかし大切なのは、覚えてからの反復練習です。言葉や文字の学習では、それを覚えることよりも、使うことに意味があります。覚えるまでの練習より、覚えてからの使い方のほうがずっと大切なのです。

幼児は繰り返しが好きなのですから、その特性を漢字教育にも応用してください。教え放しにしないで、何度も何度も繰り返すのです。そうすることによって、漢字を脳に深く刻み込ませるのです。

●……時間を決めて繰り返し教える

食事の前後に、漢字カードを見せて読んでやるのもいいでしょう。カードを見せるのは、一枚当たり数秒でいいと思います。あまり長すぎても、短すぎてもよくありません。この時間は守るようにして下さい。

初めは、幼児が喜びそうな字がいいでしょう。

たとえば、その子が「犬」好きなら「これは健太クンの好きな犬という字よ、犬」というように、普通の速さで二、三回繰り返して読んで聞かせます。口を大きく開けて、はっきりした発音で言います。

これを食事の前後の決まった時間に行います。つまり一日六回、まずは三〇秒ほどの学習になります。このとき必ず漢字カードを見せてやる必要があります。もし一回で覚えたとしても、必ず

繰り返すことです。

二日目は、まず昨日の漢字カードを見せて「これは何て読むのかな？」と聞きます。たいていは昨日の反復練習で読めるはずです。読めたら次の漢字です。これも子どもの好きそうな漢字から、「猫」でもいいし、「桃」でもいいし、「苺」でもかまいません。これを最初の日と同じ要領で繰り返します。

三日目は一日目の漢字と二日目の漢字を見せます。もし二日目の字を読めなかったら、三日目は二日目と同じことをやって、新しい字は教えません。読めなかったらといって何も焦る必要はありません。やさしく教えてやりましょう。じっくりと取り組む姿勢が何といっても大切です。

こうして最初の一週間を乗り切れれば、まず成功です。子どもも要領を得て、あとはどんどん覚えていきます。大事なことは最初に呑み込みが悪くても焦らないことです。子どものヤル気をなくさないようにしてください。

親が怒ったり、やさしく言ってもやらないと、漢字嫌いになることもあります。ニコニコ笑って教えてやりましょう。

ポイント：自分から進んでやらない者に教えるということはないことです。つまり「課す」というのはよくありません。孔子も『論語』の中でこう言っています。「扮せざれば敬せず、しせざれば発せず」と。ですから宿題を出すなどというのは、学校のあり方として正しくないと思っています。

●……一週間で一字卒業

こうして一週間が過ぎると、順調にいけば一日ごとに「この字は何て読むの？」と質問する漢字が増えていきます。八日目には尋ねるカードが七枚になります。それから新しく覚えるカードが一枚です。

ここまできたら、質問するカードは七枚より増やさないで、これからは新しく覚えるカードが一枚増えるたびに、最初の一枚から減らしていきます。つまり八日目以降は、毎日七枚ずつ質問して、新しく一枚教えるというパターンが定着してきます。

新たに覚えるために一日、読めるようになるために七日間を使うわけです。一つの漢字を毎日

六回ずつ読み、これを一週間続けたということは、合計四二回繰り返したことになります。これだけ繰り返せば、この漢字は卒業ということになります。

このような積み重ねで、三年間で一〇〇〇〇字近くが読めるようになるわけです。無理なく、「一日一字一週間」の計画で進めていくことをお勧めします。これだけの漢字を知っていると、本はどんどん読めます。本を読む力がつくことは、自分で調べる力がつくことにつながります。最初は何でも親に聞いていたのに、もう親を頼らないで自分で解決して、新しいことを次々と吸収していきます。

●……目と耳を使わせることで「かな」を教える

漢字を二〇〇〇〜三〇〇〇字覚えたら、今度は「かな」を教えましょう。

このときも耳だけで聞かせないで、目でも見せるようにします。目と耳の両方を使って理解させます。まず、すでに知っている漢字、たとえば「白」「青」「赤」などに「雪」「海」「靴」をくっつけて幼児に教えます。

つまり「白い雪」、「青い海」、「赤い靴」という形容詞のついた単語になります。これらの漢字はすでに知っていますから、「い」という字をすぐにわかって覚えられるのです。幼児は「白い」、「青い」、「赤い」という言葉を使っていますが、これを「白」と「い」というふうに分析して考えるところまでは理解できていません。

ですから、すでに知っている言葉を結ぶものにこういう字があるんだ、というような感じで「い」という「かな」の発音と、それを表すかな文字を教えていきます。このときに書いたものを一緒に見せてやるようにします。

こうして、二つの言葉をつなぐ文字として、「い」という字があることがわかるようになるのです。これを繰り返すうちに、自然といろいろなひらがなが頭の中に入ってきます。

テーブルに赤い箸が置いてあったとします。「赤」と「箸」という字はわかっていますから、「これは赤い箸だ」ということが理解できるようになります。おのおの言葉がわかっていけば、自然にそれらを結びつける「い」という文字が出てくるようになるのです。

同じように、「母」という字の上と下に「お」と「さん」をつけることで、「お母さん」というふうにより、普段自分が使っている言葉になることを知ります。「おばあちゃん」には「ちゃん」でいいのです。漢字とまぜて教えているうちに、「かな」は自然に読めるようになります。

●……語尾の変化を通して「かな」は覚える

「歩く」という言葉があります。これは「歩かない、歩きます、歩く、歩け、歩こう」という具合に、「かきくけこ」と語尾が変化します。これを外国人に教えても、正しく使えません。ほとんどの外国人は基本型の「歩く」しか使えないものです。

「歩かないよ」、「歩きます」、「命令形でも「あなた、歩く」という言い方になってしまいます。「かきくけこ」と変化することが理解できていても、実際にはそれをうまく使いこなせない場合が多いのです。

ところが、三歳の子どもは、そんなふうに教えなくても「かきくけこ」がちゃんと使い分けできず。これは幼児の頭がひとりです。この理由を論理的に説明づけることはむずかしいのですが、外国人のように考えて使い分けてもいけないのに、未然形を使うべきところは未然形を、連用形を使うところは連用形を使います。つまり頭は単に言葉を記憶しているだけではないのです。

それをちゃんと消化し、そこから法則をつくり出しています。そしてその法則を使い言葉を話していると考えなければ、説明つかないわけです。無意識のうちに、論理的な思考をしているわけです。

この語尾変化を通してひらがなを覚えます。

「歩く」では、かきくけこ

「探す」では、さしすせそ

「立つ」では、たちつてと

「死ぬ」では、なにぬねの

「読む」では、まみむめも

これを七五枚ずつA、B、C、Dの四つのブロックに分けてありますがAからCまでは名詞で、Dは形容詞・動詞になっています。他に無地のカードが二四枚ありますので、必要に応じて適時言葉を書き込むこともできます。

一日一字ずつ一週間反復学習する使い方のほかに、このような遊び方をして楽しむこともできます。無理じいせず、遊びながら学ばせることができるでしょう。

(1) かるた取り……何枚か読めるようになったら、そのカードを並べて親が読んでやり、子どもに取らせましょう。

(2) 仲間集め……動物、植物、乗り物など同類のカードを選び、関係のないカードも混ぜながら並べ、「この中から、動物(植物、乗り物)はどれでしょう」と言って子どもに取らせます。また逆に「この中の仲間はずれはどれでしょう」と質問して、関連のないカードを選ばせることもできます。

(3) 反対語ゲーム……Dのカードを使って、長い―短かい、重い―軽い、暑い―寒い、笑う―泣くなど反対語のカードを選び、バラバラにして「対」になるように拾わせて見たり、親が何枚かのカードを持ち、たとえば「高い」のカードを見せると、子どもが「低い」を捜し出すような遊び方もできます。

●……こんな絵本も読めるようになる

次、来た、中、山羊、お前、一飲み、突然、橋、上、恐ろしい、顔、現れる、突き出た、鼻、今度、食べて、大きな、口、開けて……。

これは次のページの絵本(石井式・漢字の絵本 応用編『三匹の羊』より)に出てくる漢字および漢字まじりの言葉です。百字ほどできてきている文章の中で、約四分の一が漢字になっています。これだけの漢字を幼児がスラスラ読めるとしたら、読書のスピードはまったく違ってくることは一目瞭然でしょう。



この中でも「中・上・出た・大きな・口」など、小学校一年生で学ぶ漢字はともかく、「現れる・恐ろしい」などの字も読めるとすれば素晴らしいことでしょう。しかし特徴のある字ほど覚えやすいことから考えてみれば、このような字を読むことがそれほどむずかしいことではないことは前述した通りです。

また「山羊・突然」のような熟語も、丸ごと覚えてさせてしまえば簡単です。「山羊」は子どもにとって、その姿（存在）が生き生きと目の前に浮かぶ動物ですし、この言葉を見れば『羊』という字が入っているから、羊の仲間の動物なんだなということも推察するでしょう。

「突然」の場合は「これは『急に』という意味なんだよ。ほら、今までいなかった怪物が出てきただろう」と説明してやれば、幼児にも理解できます。

私たちは絵本はひらがなと思いついていますが、そこに大きな誤りがあるわけです。絵本も漢字まじりのものを選ぶべきです。ひらがなだらけの絵本でしたら、上から紙を貼って漢字で書いてみたらいいでしょう。

●……幼児には大人にない理解力がある

「きれい」という言葉があります。あるとき、三歳になる私の孫が「きれくない」と言いました。何かというと、「きれい」を「美しい」と同じように、形容詞だと思っていたからです。

「美しい」の否定形は「美しくない」となります。ですから「きれいの「い」を「く」に変化させてしまったんですが、「きれい」は変化する言葉ではありません。

しかし、この二つが同じような性質を表す言葉であることは事実です。このため子どもの頭では「きれくない」という表現になってしまったのです。

幼児でも、ただ単に言葉を聞いて覚えているだけではなく、変化の法則まで把握して、語尾の変化をさせているのです。幼児のこういう能力はすごいと思います。理屈ではなく、現実に言葉に接して体得するものであって、子どもの頭には、こういう法則をつくり出す働きをする何かがあると思わざるを得ません。

幼児にこんな能力があるということ、大人たちは知らないだけです。幼児には文字の学習なんて無理だと思って、泥遊びみたいなことだけをさせていますが、本当は文字を覚える能力はすでに備わっているのです。文字を、漢字を覚えるにも十分だということを理解しておいて欲しいものです。

ポイント：字形が複雑だということは、記憶の手掛かりが多いという利点があります。す。むずかしい字だから覚えにくいということではなくて、複雑な字ほど一回見ただけで特徴が何となくつかめて、覚えやすいのです。

●……読書好きにさせるには

こうしていろいろな言葉を覚えてきたら、今度は本を読んでやりましょう。もちろんひらがなだけの絵本などでなく、漢字がまざった本と一緒に文字を追いつながら読みます。

そのうちに、子どもは読んでもらわなくても、ひとりで読むようになります。子どもは自分でできるということに非常に喜びを感じますから、こうなれば自分のほうからどんどん本を読みたい

と思うようになるはずです。

いきなり「本を読みなさい」と言っても無理です。強制して読ませたとしても、消極的な子どもをつくるだけです。いつも口をあけていけば、親が食べ物を与えてくれるから、言われた通りにしていればいい……というような子どもになり、知識欲の乏しい子どもになってしまうのです。

本当の教育とは、自主的にヤル気が起きるように道を開いてやることです。つまり子どもの意欲をよい方向に伸ばしてやることなのです。

子どもが漢字に興味を待っているかいないかは、子どもの目を見れば容易にわかるはずですが、無理な強制は、子どもをダメにします。子どもの意欲を伸ばしてやることこそ、親としての最大の義務なのです。

●……漢字の成り立ちから興味を持たせる

漢字がわかるようになったら、漢字の成り立ちを教えていきます。そうすると漢字に対する興

味がさらに大きくなります。

漢字はこういう具合に二つの字がくっついているということで説明します。たとえば「左」という字は、元の形は手の形で、この手の形に定規の形を表した工という字。定規を持つ手は左だから、手と定規を合わせて「左」になる——といったように。

「右」は手に口という字で、口へ持っていく手は右手だよね、だからこれは右になるんだよ、というように教えます。

このような教え方をすると、それまで漢字が嫌いだったり苦手だった子どもも、興味を持ち始めるようになります。そうして知らないうちに、漢字を見てその成り立ちから推理する力もついていきます。子どもたちが、いかに楽しんで漢字学習ができるかということを考えてやるべきなのです。

よく、どんな教材を使ったらいいか、という質問を受けますが、本や教科書は使っても使わなくても、どちらでもいいです。漢字って面白いなあって思わせるような教え方をしましょう。

ポイント：漢字教育というのは、相手が多ければ多いほどいいのです。大勢の人から耳にすることで言語は豊かになりますので、母親とばかりやっているのでは発展がないわけです。お父さんも、そして同居していればお祖母ちゃんやお祖母ちゃんも、一緒にポイント：漢字教育というのは、相手が多ければ

……漢字の「漢」はどうしてサンズイなのか

たとえば漢字の「漢」という字は「さんずい」だから、「水」に関係ある文字です。ではどうして「漢」には水の印がついているんだろう？ というふうに話を持ち出します。

子どもたちは不思議だなという顔をします。そこで初めて、漢字の「漢」がどうして「さんずい」とかという疑問を持つのです。

そこで漢字の「漢」のお話を始めます。まず中国の地図を書きます。幼児のいる家庭でしたら、ぜひ世界地図と日本地図は購入しておいてください。

こんな説明でいいのです。

「ここに黄河という川が流れているんだよ。中国の中央には揚子江というのが流れている。

二つの川のちょうど真ん中を漢水という川が流れていて、そのあたりを漢といったんだ。その漢の中ほどに漢中というところがあってね。昔、この漢中の王様に劉邦という人がいて、これがものすごい英雄だったんだ。項羽というもう一人の英雄と戦って秦の国を滅ぼし、漢帝国という王朝をつくったんだよ。

なぜ漢王朝という名前をつけたかというと、漢水のちょうど中ほどにある、漢中の劉邦が王朝をつくったから、漢中の『漢』をとって国の名前にしたんだよ。

その漢という国は、今から二〇〇〇年ほど昔につくられた国だけれども、中国を統一すると文字を新しく制定したんだ。漢王朝が制定した文字だから漢字という。

この文字は隸書といって今の楷書とは少し違うけれども、楷書の基になる、つまり今の漢字の基礎だったんだ。だから今でも漢の名前を取って『漢字』といわれている。でも漢というのは川の名前から、「さんずい」がついているんだね」

こういう教え方をすると、漢字とはそういうものかと目が開かれるのです。そうすると子どもは

考えるのです。どんな字でも「これはこうだよね」と言ってくるようになります。そういうときに、もし子どものいうことが違っていても、違うと言っではいけません。

「面白いね、そうだね」と言っでやるのです。子どもが発明した考え方はみんな受け入れてやりましょう。

「違うだろう、そうじゃないよ」と言っではいけません。子どもなりに納得できれば、その漢字について認識が深まったことになりますから、何も「辞書にこうあるよ」などということを、いちいち言わなくてもいいのです。

●……この漢字はどう教えたらいい？

● 「重」と「軽」

二つのマッチ箱を用意して、それぞれに「重い」「軽い」という漢字カードを貼ります。重いほうにはクギか何かを詰め、軽いほうは綿を詰めるか空にしておけばいいでしょう。ただしこれは抽象語

ですので、箱の中身を入れ替えたりして聞いてみる必要があります。

● 「長」と「短」

リボンでも用意して、これに「長い」「短い」のカードを貼ります。このとき違う色にしておくど色を感じることも役立ちます。また、たとえば白を長くして、赤を短くしたとすると、今度はその反対をやってみれば、「長い・短い」の違いが本当に理解できたかがわかります。

● 「熱」と「冷たい」

「冷たい」は本文でも述べたように氷の入った袋を持たせます。「熱い」はお茶碗に熱めのお湯を入れ実際に触らせます。このとき茶碗に「熱い」と書いておきます。

● 「タオルが濡れちゃったわね」

最初に乾いたタオルを触らせます。その後でそのタオルを濡らしてもう一度触らせます。そうすると手の感触でこの字の意味がわかります。また少し漢字がわかっていれば、この字の「さんずい」から、水に関係することなのだということがわかるでしょう。

● 「タオルを乾かしましょうね」

「濡れたタオル」を触らせた後で、一緒に干しましょう。干しながら「干す」という漢字を示します。乾いた後で、タオルに「乾く」というカードを貼って触らせます。手の感触で覚えさせます。こうすると「干す」という行為の意味もだんだんわかってきます。

● 「新聞を取って来て」

初めは新聞に漢字カードを貼り、「お父さんに持って行ってね」と言います。子どもはけっこう喜んでやりますから、持って来たら父親は褒めてやりましょう。そのうちに「新聞」というカードを見せて取りに行かせます。いつも持って行っているものだから、自然と覚えていきます。

● 「靴を揃えてね」

子どもが出かける前に靴に漢字カードを貼っておきます。「靴」を覚えたら、帰って来た子どもにわかるように靴を揃えておきます。そうすると靴を揃えることは、帰って来たときと反対に向けて、次に履くときに履きやすくしておくことなるとわかります。

● 「電気を消しましょうね」

電気に漢字カードを貼ります。スイッチのところにも同じカードを貼ります。そうしてスイッチを切つて電気を消して部屋を暗くします。電気を消すのは寝る前にいつもすることなので覚えていきます。

● 「一、二、三……」

おはじきでも積み木でもみかんでも、その数を入れた入れ物に漢字カードを付けておきます。抽象的な字ですが、目につくことも多いのでだんだんに覚えます。年齢を言うときに使いますので、指を使って教えてやるのもいいでしょう。

● 「速」と「遅」

これは抽象語ですので子どもが覚えるのはむずかしい字です。しかし「しんにゅう」は「道」に関連のあることを表す字ですから、車に乗って出かけた時にでも、その感覚で覚えさせるのがいいでしょう。「はやい」には「早い」もありますので、これは朝早く起きた時に同じ「はやい」でも二通りあることを教えてやればいいのです。

●「お母さんの指輪を取って来て」

子どもは母親の手はよく見ていますから、指輪と言うときに手真似をしてやればすぐにわかります。テーブルの上にも漢字カードをつけて指輪を置いて取って来させます。ここから丸いものが「輪」ということを教えるのにも役立ちます。

●「三輪車に乗ろうか」

輪が三つある乗り物ですから、これは比較的簡単に覚えられるでしょう。三輪車に乗せる前にいつも漢字カードを貼って見せていけば、自然とこの漢字がわかるようになるでしょう。三輪車から自転車に変わる時に、自転車は二輪車なのだと教えれば、違いがはっきりします。

●「高い」と「低い」

柱に身長計を貼り、「背が高くなったわね」と言って、以前に計った身長と比べて見せます。その時に「高い」「低い」のカードを貼ります。次に計ったときは「高い」だったのが「低い」に変わりますから、その意味合いをだんだん理解していきます。背が高くなったことは褒められたと思いますので、覚えやすいと思います。

●「自動車に乗ってお出かけしようね」

子どもは車が好きですから、車に乗せるときに「自動車」という言葉を使い、車の中の目につくところに漢字カードを貼っていればすぐにわかるようになります。三輪車などと比べて、同じ「車」という仲間なのだと理解していきます。

●「窓を開けましょうね、閉めましょうね」

目につきやすい高さの窓ガラスに「窓」というカードを貼ります。子どもはよく外を見ますのでこの字をすぐに覚えると思います。その後で、開ける時、閉める時にそれぞれの字を見せます。ともに「もんがまえ」の字という共通性を見つけ認識を確かにします。

●「白い靴下を履きましようね」

出かけるときには必ず靴下を履きますから、「靴を履いて外に出る時に履くもの」という感覚ですぐに覚えるでしょう。靴も含め「履く」という感覚もわかってきます。この時、靴下の色をいろいろ用意して子どもに「好きな色」を漢字で認識させるのにも役立ちます。

● 「林檎をむいて食べようね」

「林檎」という字は今ではあまり漢字では使われませんが、特徴のある字ですので一度教えたら見ればすぐにわかるでしょう。漢字はあくまでも読めることが必要ですから、こういう字を教えるのもいいと思います。これは蜜柑でも西瓜でも梨でも同じです。果物は子どもの好物なので、覚えやすいと思います。

● 「ゴミを拾ってね、捨ててね」

「拾う」と「捨てる」は、大人でも間違えてしまいがちな漢字です。ですから余計に最初からはっきりさせておいたほうがいいでしょう。ともに「手」でする行為ですから、“てへん”の意味がわかっからやりましょう。

● 「炬燵に入りなさい」

今や「炬燵」などと漢字で表記することは少ないと思いますが、読めることは必要でしょう。子どもにとって「炬燵」ははっきりとした実在ですから、この字を貼って見せると「火」つまり“あつい・あたたかい”ものということで、記憶に残るでしょう。

● 「花瓶のお花は何本？ 何色？」

「花瓶」という字は「花」を覚えれば類推しやすいでしょう。これがわかったら、知っている色や数の花を入れて聞きます。この時花の種類をいろいろ変えてみると花の名前を覚えるのにも役立ちます。これは菊でも薔薇でも、カタカナのチューリップなどでもいいと思います。かなやカタカナは抽象的な字ですが、こういう身の回りのものから覚えていきます。

● 「時計が鳴ったね」

子どもは特別なことがないと「時計」に興味を示さないかもしれませんが、時計が鳴った時に目を引いて「時計」の存在をわからせるようにします。「御3時からテレビが始まるわよ」みたいに、算用数字を覚えさせるにもよいでしょう。「鳴る」がもともと「鳥」に由来していることを教えるのもいいのです。

● 「猫」や「猿」や「狼」

動物は子どもの関心が強いので、“けものへん”を理解させるのに役立ちます。この共通項を見ればそれだけでいいと思います。動物も今はカタカナ表記が多いのですが、読めるだけはしてや

ったほうがいいと思います。

● 「電話がかかってきたわね」

“あめかんむり”が「雨」に関係ある言葉で、それが「電気」に関係する とわかれば、「電話」という単語はすぐにわかるようになります。とにかく“人がいなくても話せる機械”という感じがわかります。子どもは電話好きです。呑み込みも早いはずです。

● 「お茶碗を持って食べなさい」

自分で食事をはじめた幼児にとって「茶碗」は最も身近なものです。「茶碗」という言葉だけでなく、「持つ」という言葉も教えましょう。“てへん”が理解できれば、“手ですること”すなわち「持つ」という行為もわかりやすいと思います。

● 「お母さんのお手伝いをしてね」

「手伝い」ということは「手」を使ってすることというのはすぐにわかります。「伝」は“人が言うこと”ですから、「ああ、お母さんの言うことをやればいいんだ」と思います。この時に漢字カードで見せてやります。

● 「大根」や「人参」

これも今ではカタカナ表記も多いものです。しかしどちらも確かな実在ですから、一緒に八百屋さんに連れていって見せましょう。家を買って帰ってからも、野菜カゴに漢字カードを貼っておけば効果は増します。「葱」だって読むだけなら簡単です。

● 「扇風機をつけましょうね」

これは、「風」と「機」がわかってからがいいでしょう。「扇」が風を起こすものだとかわかれれば、“暑い時に風で涼しくしてくれる機械”という感じがつかめます。今はクーラーのほうが一般的ですが、これも同じ機能の仲間だと教えればよいでしょう。

● 「お手洗いが「トイレ」や「便所」になる

「手を洗う」ということは最初から厳しくしつけていますので、“手を洗う”という行為はわかって、それが「トイレ」や「便所」になるとわかりずらいでしょう。しかしここは毎日何回も行きます。トイレのドアに三種類貼っておけば、自然と同じ所なんだとわかります。

● 「積み木で遊ぼうね」

「木」を知って、それが生えている木だけでなく、それを使って作ったものもこういうのだという認識が生まれます。子どもは「積み木」好きですので、「積み木遊び」を通して「積む」ということが上に重ねていくこと」という認識ができます。

● 「羊」と「山羊」

どちらも子どもは絵本や動物園で知っているでしょう。「羊」は“美しいもの”のことですが、それよりも字に二本の角があつて分かりやすいのではないのでしょうか。“ウールマーク”で羊の絵もたくさん目につきますので、それがわかったら山にいる羊が「山羊」になると話してみてもいいでしょう。か、理屈ではなく呑み込めると思います。

● 「砂糖」と「塩」

どちらも同じような白いものですから、見た目では区別が付きません。実際になめさせてみたほうがいいでしょう。二つに漢字カードを貼って並べて味合わせてみて分かせます。同じような“白い粉”でもまったく味が違うので、子どもの認識も強くなります。

● 「絨毯」

大人でもこの字を読める人は少ないと思います。しかし漢字は書けなくても読めればいいわけですから、目につくところに書いて貼っておきましょう。本文でも述べましたように、複雑な字ほど記憶には強く残ります。読むことに漢字の意味を求めましょう。

● 「お年玉あげようね」

「年」という字がわかれば理解しやすいでしょう。もともと「玉」は貴重なもの、お金を表していますから、こういつて教えてやれば実感があります。こういうことを考えれば、最初は「お年玉」はコインのほうが望ましいかも……。

● 「楊枝を取って」

楊枝入れに「楊枝」と書いて貼っておきます。でもこれでは何に使うのかわかりませんから、実際に使ってみせてやる必要があります。「楊」も「枝」も“きへん”がつきますから、子どもは案外この共通性を見つけ、「木」はいろいろな物になるのだなあ、と認識を新たにします。